

「三度目の死と復活の予告」

2014年10月10日

マルコによる福音書 10章 32節～34節。一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。「今、わたしたちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。異邦人は人の子を侮辱し、唾をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」

主イエスは、先頭に立ってエルサレムに向かわれた。その姿はいつもとは違う厳しいものであった。弟子たちは、それを見て、驚き恐れたと記している。十字架の死を決意した迫りに圧倒されたのである。しかし彼らは、主イエスの思いを全く知らず、そのことについて聞こうとしなかった。

途中で、主イエスは12弟子を呼び寄せ、エルサレムに上って、自分の身に起こること、即ち、十字架の死と死よりの復活について、三度目の予告をされた。三度目は、前の二回より、更に突っ込んだ予告であった。私たちは、今からエルサレムに上って行く。そこで、私はエルサレム神殿の権威ある祭司長や律法学者たちに捕縛され、死刑を宣告される。そして、彼らは異邦人に引き渡し、異邦人は侮辱し、唾を吐きかけ、鞭打ち、殺す。しかし、私は三日の後、復活する。

なぜ、主イエスは侮辱を加えられ、理不尽に殺されていくのか。主イエスの「愛」がもたらしたと考えられる。並みの愛は人々から喜ばれ、賞賛される。ところが、あまりに真実な愛は社会を変革する力を持っている。その変革を許さない勢力が愛を危険と見なし、葬り去ろうとする。主イエスは、この構造の中で殺されていった。

旧約聖書の預言者たちは、神の愛と正義に身を置いた。彼らは愛と正義に反する罪を弾劾し、悔い改めの言葉を語らざるを得なかった。しかし、その言葉は耳障りで、人々は預言者たちを迫害し殺していった。もちろん、耳をくすぐるような言葉を語り、人々から拍手喝采を浴びたニセ預言者たちもいた。真実な愛は正義を求める。正義とは互いを受け入れ、共にあることである。権力者たちはピラミッド型の差別、序列化した管理社会を造り、横暴な支配権を振う。この権力構造では、愛を打ち消す強力な力が働く。

エルサレム神殿の祭司長や律法学者たちは、律法によって清い者と汚れた者を峻別した。汚れた者を「罪びと」として排除した。主イエスは排除された「罪びと」を招き、彼らこそ神の恵みと祝福の中にあると、言葉と行いにおいて、その事実を「神の国」として現された。打ち捨てられていた人々は大喜びした。しかしこれは、造りあげてきた宗教的差別管理社会を壊すことであり、神殿当局は許すことができないことであった。主イエスの真実の「愛」は拒否すべきものと見なされ、侮辱の末、十字架で殺されていった。

主イエスの死は愛を無力化する、いつの世でも見られる悲劇である。ところが、主イエスは死から復活された。復活した主イエスに出会った弟子たちは、無力化された愛が復権したことをリアルに受け止めた。彼らは喜び「福音」として宣教した。教会はこれを継承していったが、日本基督教団は社会を変革する愛に生きているであろうか。